

立命館大学大学院言語教育情報研究科主催公開講座 「英語学と英語教育の接点」

立命館大学大学院言語教育情報研究科では、基本的に3ヶ月に1度、研究科主催の公開講座「英語学と英語教育の接点」を開催することとなりました。どなたでも参加して頂けます。

この情報は、転送自由です。

実施形態：対面

会場：立命館大学衣笠キャンパス（京都市北区等持院北町 56-1）
平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム

立命館大学衣笠キャンパスのキャンパスマップ：

<https://www.ritsumei.ac.jp/campusmap/kinugasa/>

立命館大学衣笠キャンパスへのアクセス方法：

<https://www.ritsumei.ac.jp/accessmap/kinugasa/>

参加費：無料

申し込み：不要

問い合わせ先：takizawa[アット]li.ritsumei.ac.jp

第1回は、**2025年4月27日（日）**に開催します。

10:40-12:00：滝沢直宏「平易な語の有効活用：英文法と英語表現の接点を探る」

概要：英語には、読めばすぐに自信をもって解釈できても、自分ではなかなか書けない表現が多々ある。例えば、(1) He was born to an American father and a Japanese mother.や(2) Humans are born with the ability to acquire a language.という文は、難しい語は全く使われていない平易な文だが、いざこのように書こうとすると、（大学での英語教育の経験から判断して）容易ではない。一方、(3) He was born in Tokyo.のように、中学生でも容易に表現できる文もある。(1)(2)のような文は、いわば「書けそうで書けない」英文と言える。この種の英文には、-ly 副詞が関わるものも多い。例えば、freshly baked bread や mainly because~のような表現である。-ly がないと、中学校で習う平易な語 (fresh、main) なのに、-ly が付いたパターンになると急に難度が増す。本書では、こうした「書けそうで書けない英語」に注目し、中学必須単語を有効に活用する方法を探りつつ、日英語の構造上の相違と関連させながら文法と表現の接点を考える。

12:00-12:50：昼休み

12:50-14:10：山崎のぞみ「英語の話し言葉文法－自然な会話のしくみを探る」

概要：自然発生的で双方向的な話し言葉は、フォーマルな書き言葉に基づいた伝統的な文法とは異なる独自の「文法」を持つと考えられており、「話し言葉文法(spoken grammar)」研究が進められている。本講座では、話し言葉に特徴的な文法の全体像を概観した後、個別の文法項目を取り上げ、話し言葉における使用実態を探る。また、話し言葉文法との関連で、言語の変異 (variation) と変化 (change) の問題についても考察する。話し言葉には、地域・社会階層・性別・年齢などによる社会的言語変異が見られ、言語の変化は話し言葉から生じることが多い。これら共時的・通時的要因は、話し言葉に見られる非標準形式に対する容認度にも影響する。最後に、話し言葉文法研究を、英語教育や言語教育にどのように活かせるかについても考えたい。

14:20-15:40：David Coulson「日本の中・高生の深い語彙知識の発展とその測定」

概要：新しい言語の習得には語彙の学習と知識が不可欠である。まず、語彙知識の構造を紹介する。これには「形式」「意味」「使用」の3つの主要な側面が含まれる。これを通して、単語の学習とは、単に2つの言語間の訳語を暗記する以上のものであることがわかるだろう。次に、新しい言語を使えるようになるために最低限必要な単語数について説明する。これはジップの法則という概念と関連しており、言語学の場合、比較的少数の単語が文章中の単語の高い割合を占めることを説明する。このことが学習に与える影響について説明する。次に、学習における各単語との遭遇回数について説明する。学習における忘却曲線の重要性についても説明する。最後に、日本人学校生徒の様々な形式の語彙知識の学習に関する私の研究結果を説明する。簡単に説明すると、読解力に不可欠な単語の視覚的認識速度の発達と、高頻度単語のコロケーション知識の発達である。その結果、語彙知識の発達は通常考えられているよりも複雑で不均一であることがわかった。

15:45-16:15：全体討論